

たとへば、魚をイヲとも、ウヲともいふが如し、イマといひ、ウマといふ義の如きは并に不詳發語はの詞なるべし、古語には、目をマといひしにや、
ば、イマとは目前の時をさして云ひしにや、

〔倭訓栞伊前編三〕いま 今をいふ、是時也と注す、日本紀にうまとも見えたり、されば濃州のあたり
に馬と今とを互に謬りたる所あり、或は如今、而今、乃今、今者、在今、今也などをよめり、いは發語、ま
は目の義、目前の意成べしといへり、中庸に今夫天云々、今夫地云々の如きは、まのあたりをもて
いふ辭也といへり、我邦の口語も亦然り、又説文には今急也と見ゆ、是も口語に多し、俗にやがて
といふに同じ、

〔古事記上〕菟答言略 中 今將下地時、吾云、汝者我見欺言竟、即伏最端和邇捕我、悉剝我衣服、

〔古事記傳十〕今將下地時、凡そ今と云に三意あり、一には字の如く常云今なり、二には今一など
云て、有が上に猶添むとするを云、三には將然ことの近きを云、俗にやがてとも、おつといふなり、
今返來むなど云是なり、此に又一意あり、今早と催すに用ふ是なり、又今こ、は其意にて、地に
下むとするほどの近きを云、

〔日本書紀神武三〕戊午年十月、我卒聞歌、俱拔其頭椎劍、一時殺虜、虜無復噍類者、皇軍大悅、仰天而咲、因
歌之曰、伊莽波豫、伊莽波豫、阿阿時夜鳩、伊莽懷而毛、阿誤豫、伊莽儀而毛、阿誤豫、十一月、皇軍攻必
取、戰必勝、而介冑之士不無疲弊、故聊爲御謠、以慰將卒之心焉、謠曰、略 中之摩途等利、宇介警餓等茂、

伊莽輪開珥虛禰

〔日本書紀神九〕九年哀 十月、新羅王遙望以爲非常之兵、將滅己國、誓焉失志、乃今醒之曰、略 下

〔伊勢物語上〕昔わかき男、けしうはあらぬ女を思ひけり、略 中 昔のわか人は、さるすける物思ひを

なんしける、今のおきな、まさにしなんや、

〔古今和歌集八離別〕題えらす

在原行平朝臣